

◆目的 茶事とは客に抹茶を飲ませるだけではなく、炭点前、懐石料理、濃茶、薄茶まで要する最も正式な接客方法である。茶の点前は、茶室で行うが、これの準備のために水屋が必要である。茶事となるとこの上に料理を作る台所も必要になる。客は露地から茶室に入るから、水屋や台所は見えない。しかし実際には水屋や台所など裏側の方が広さや使い勝手が重要である。そしてこの裏側如何によって使いやすい茶室かどうか、決ってしまう。そこで使いやすい茶室とはどのような裏側をもっているか。年代や設計者等によりどの位違うのかを文献から調査した。

◆方法 主に茶事のできる茶室を、重要文化財等、一般住宅、公共建築と分類して61件を選び、主に平面図から茶室と裏側（水屋・台所等）の割合を分析し、比較、考察した。

◆結果 年代の古い重要文化財等の方が、裏側が広くとっており、一般住宅や公共建築ではやや狭くなっている。とくに一般住宅や公共施設では裏側が非常に狭く、茶事はできないと思われる茶室もいくつかあった。また重要文化財等では茶室主体の建物が多かったのに比べ、一般住宅や公共施設では茶室主体のものはほとんどなく、他の用途と兼用に使われるスペースが多いことも解った。次に茶室と裏側の広さの割合を見ると、重要文化財等では、裏側の面積は茶室の50%程度となっている。最近のものは設計者によってかなり異なり、使いやすい茶室となるかどうかは、裏側を設計者がどう把握しているかにかかっていると言えそうである。結論としては、裏側を茶室の40%程度の広さをもたせて設計するのが妥当であり、使いやすくなると考える。